

第9回 雲南の地域医療を考えるシンポジウム

【発行者】
雲南地域医療
を考える会
平成26年6月

平成26年5月24日(土) 飯南町保健福祉センターにおいて、第9回雲南の地域医療を考えるシンポジウムを開催しましたので、その概要について報告します。現在、国においては団塊の世代が75歳以上となる2025年を前に、高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、地域の包括的な支援・サービス提供体制として「地域包括ケアシステム」の構築を推進しています。そこで、今回のシンポジウムは「それぞれの地域包括ケアシステム、今から実践できること」をメインテーマに、飯南町において開催いたしました。



ご挨拶いただいた原部長様(上)、西村副町長様(下)



みつき総合病院を中心に進めてきたことが原点であり、いわば発祥の地である。ただ、これから紹介する内容はこれが包括ケアという意味ではなく、その地域その地域での包括ケアというのがあるべきであり、それが正しいと思っている。



当日は、200名を超える方々にご来場いただき、貴重なご意見もいただきました。また、来賓として島根県健康福祉部から原仁史部長様、飯南町から西村秀樹副町長様にお越しいただきご挨拶いただきました。

「寝たきりゼロ作戦」と称し、いわゆるつくられた寝たきりにみすみすなることを防ごうということや出発点である。出前診療を始めた当初は、御調町としても保健師が家庭訪問をしており、町と病院とが別々にやるのはおかしいと当時の山口院長が思い、町長と掛け合い病院に保健師を直接採用し、同時訪問する中で生活目線からの支援と予防、それと早期発見、早期治療を一緒にやって行こうということにした。現在の保健師数は、免許取得者が16名でその内実働が9名いる。これもすべて病院採用であり、旧御調町全域をカバーして保健師活動をやっている。人口2、500人に1人保健師がいたらその町はすごく予防に力を入れているということであるが、旧御調町は人口7、500人であり、その中で実働の保健師が9名いるということはいすごいことだと思っている。

次に病院の特性についてであるが、総合病院として専門的な役割も担っている。特に特徴的なのは、リハビリテーションと緩和ケアの病棟を持っていることだと思ふ。リハビリスタッフは、病院、施設、訪問看護ステーションを合わせて全部で90名近くおり、リハビリに関しては圏域を超えて急性期病院からの紹介がある。

施設に関しまとめると、一般的に行政部門と言われているものが、当院では病院事業体の中に保健師や尾道市からの出向職員を配置して一つの部門として

る。また、原点である寝たきりゼロ作戦を今も展開しており、その核になるのが総合病院であるが、訪問診療や訪問看護についても、訪問看護ステーションを設置して行っている。更に、これらを支える意味で通所を含めた介護施設も経営しており、寝たきりゼロ作戦から展開した結果がこのようになっていく。

次に職種間の連携についてであるが、特に多職種協働ということが大切であり、これがないと意味がないと研修医にも言っている。特に最近の若い医師は、病院での医療、その中でも何科の専門というのが一番で、そういう響きが好まらしいが、それだけではなく保健師や包括支援センターの手伝いをしたり、健康セミナーなど予防にも携わるべきであり、デイサービス、デイケアのスタッフやケアマネジャーなど様々な職種の方が高齢者の健康に不安を持ちながらサービスを提供しており、その時に医師が知らん顔をしていたら話にならないと思う。

包括ケアをやる上で大事なことに、余り専門性を出しすぎることなく、その人全体を生活や人生の視点で見ることだと思ふ。このことをやっているのか、御調における包括ケアは崩壊すると思っている。若いスタッフにもその事を言っている。御調町が考える包括ケアシステムは、利用者さんがどんな状態、予防の段階、医療の段階、いわゆる人生のどのような段階であろうが、どこにおられようが、家だろうが、施設だろうが、病院だろうが、利用者さんやその家族のニーズに多部署、多職種が連携して継続的に応えて行くシステムを維持していくことだと考えている。

最後に、何回も言うが今日紹介したのは御調の例であり、同じようにして欲しいとか、御調はすごいでしょうとかと言っている訳ではない。それぞれの人の、それぞれの地域の、究極的には一人一人の包括ケアがあるべきだと思っている。その人の保健、その人の医療、その人の介護・福祉は誰がどのようによ

織がやるかを考えて行けたら一番幸せだと思ふが、地域包括ケアを考えて行くためにはまず目の前の患者さんの問題は何かということ、医療は医療、介護は介護ではなく、保健師が今やっている保健・医療・介護を同じ土俵で考え、仲間意識をまずスタッフが持ち、専門性を度外視し、職種に関係なく考えることが大切だと思ふ。

第一部 パネルディスカッション

テーマ「それぞれの地域包括ケアシステム」

〜今から実践できること〜

続いてのパネルディスカッションでは、雲南保健所の福澤所長に進行いただき、雲南圏域にある3つの公立病院の院長から、それぞれの病院及び地域における取り組みをご紹介いただき、その後会場との意見交換をしていただきました。

(司会) 雲南保健所 所長 福澤 陽一郎 先生

雲南保健所所長の福澤です。本日はこのシンポジウムに多数ご参加いただき、心よりお礼申し上げます。今日はそれぞれの病院長に参加していただいているが、このような場はなかなかないと思っている。それぞれの特徴ある取り組みをそれぞれの中で、地域包括をどのような形で進めていくのかということ、是非このパネルディスカッションで聞いていただきたい。

「雲南市立病院における地域包括ケア」

雲南市立病院 院長 大谷 順 先生
地域包括ケアシステムについて、当院の考えをご紹介します。地域包括ケアとは、地域に住む方が、シームレス、継ぎ目なく、医療・介護・福祉の様々なところを隙間なく安心して暮らせるような仕組みづくりという概念である。病院の者が話す若干偏りがあるが、医療というのも包括ケアシステムの大きな一部であり、病院の立場で話をさせていただくことをご了承ください。

私は、みつき病院における地域包括ケアシステムについて、雲南病院に来る前から知っており非常に良いシステムだと思っていた。しかし、これを雲南地域でやることは難しいことであるが、病院の中ではそれを実現する下地はつくっておくべきだと考え取り組んできたことを紹介する。

まず、医師会との連携、次に病病・病診連携の強化、総合医の育成、チーム医療の推進、講演会の開催、新しいところでは地域包括ケア推進センターの設置である。医師会との連携は、西村会長のお力もあり医師会事務局を院内に設置させていただいた。その後、開放型病棟も設けさせていただき、医師会の先生方が副主治医という形で入院中の患者さんの経過等を診ていただながら、在宅へと繋げていく仕組みづくりをしている。病病・病診連携については、発言力、交渉力、行動力の三拍子そろったスタッフを担当部署で





ある保健推進課に配置し、機能強化に努めた。総合医の育成については、地域や病院の中で医師を育てて行くというコンセプトの基に「地域医療人育成センター」を設置した。このセンターでは、医学生や地域医療実習、初期研修医の地域研修等を実施しており、近年多くの研修生の利用があり、病院経営上も非常に役に立っている。また、実

際病院の中で働く医師の受け皿として、地域総合診療科という科を設置し、専門医と連携を取りながら診療させていた。次にチーム医療の推進であるが、感染、褥瘡、栄養、緩和のチームを設けている。

この内、栄養と感染に関しては専門の資格があり、現在7名の有資格者がいるが、このような資格を持った専門職が医師を助けながらチーム医療として、リハビリや退院への調整をより早めるという機能も強化している。それから新しく取り組んだこととしては、地域包括ケア推進センターの設置である。地域包括ケアがこれから世の中に広まって行く中で、院内でもよりすぐったメンバーで在宅復帰や在宅リハビリ、多職種連携等について真剣に考え、ワーキンググループを作りながら機能強化を図って行きたい。

このように、保健推進課を強化すると共に地域総合診療科を設ける中で、急性期からの受け入れを速やかにする。そして在宅への復帰も病院全体で意識づけをし、チーム医療で支援する。緊急時の受け入れについては、地域総合診療科を設け救急の体制も出来る限り強化する。更に9月からは、地域包括ケア病棟を設置し、一時は松江、出雲に出られた地域の方が、速やかに帰っていただき、ゆっくりとリハビリをし家でまた生活が出来る仕組みづくりをしていきたいと思っている。

「町立奥出雲病院における地域包括ケア」

町立奥出雲病院 院長 深澤 郁雄 先生

私は、奥出雲町の中での問題に絞ってお話させていただきます。最初に当院の医師の状況であるが、平成22年に非常に厳しい時代があり常勤医が5人になってしまった。この時には救急の維持も厳しい状況であった。5人で当直をするという事は、週に1回は当直をしないと行けない。なおかつ翌日も夕方まで通常勤務をしないと行けない。このことは、あまり一般の人には知られていないことが最近分かった。我々は当たり前のように一日仕事をし、その後当直に入る。翌日もそのまま午前中外来診療をし、午後から手術に入るという事を当たり前のように行っているが、一般の方には全然当たり前だと思われていない。この状況を少しでも理解して欲しいということで、前院長の春日

先生が各地区に向いてタウンミーティングを行った。このタウンミーティングにおいて、病院も大変な状況であり、夜中の熱発等の軽微な受診はなるべく控えて欲しいと呼びかけ、地域の方々も真摯に受け止めていただいた。

次に当院の取り組みについてであるが、まず人材確保について、今後の町を支える若者たちに医療職に興味を持ってもらうと職場体験を積極的に進めている。また、病診連携や医療・介護に関わらず奥出雲町内あらゆる職種があつまつての勉強会の開催、消防署との連携によるACLS、AEDの使い方講習会等を行っている。それから、奥出雲町内の医療、保健、介護に関わる方々が一同に会

最後の、奥出雲町の入所施設の現状であるが、病院以外に特別養護老人ホームが仁多と横田に70床と65床あり、老健が旧仁多病院に81床、それから療養型の医療施設、老人ホーム、グループホーム、シェアハウスが整備されている。

「飯南町立飯南病院における地域包括ケア」

飯南町立飯南病院 院長 安田 勲 先生

私は、飯南圏域での取り組みを中心にお話させていただきます。飯南町は人口5,303人、高齢化率は40%を超えている。世帯数は人口減に反してここ数年横ばいであるが、その多くが独居世帯、高齢者のみの世帯で、高齢者の核家族化が要因で、多くは独居世帯となっている。

町の施策推進目標としては、雇用を増やす、安心な暮らしを守る、子供を増やすを掲げている。この安心な暮らしを守る具体的な目標として、住民には健康3ゼロ作戦を提示した。虫歯ゼロ、寝たきりゼロ、引きこもりゼロの健康3ゼロ作戦により、心と体の健康増進を大きな目標とした。これを一体的に生きたい村構想のもと進めることで、飯南町民の全てが生きたい村構想の健やかで安心して暮らせる町づくりを目指している。生きたい村構想とは、旧赤来町で取り組んできた生きたい村を、合併後は飯南町全体を一つの生きたい村として捉え、保健、医療、福祉、介護の連携を図ること、そして将来的には教育、文化、産業等の分野との連携を視野に置いて、これを飯南町生きたい村構想とする。すなわち、飯南町の特徴を加味した飯南町版地域包括ケア、これが飯南町生きたい村構想である。

次に、飯南町では住民に信頼され愛されることを理念に、生きたい村推進センターを設置している。このセンターの当面する重点課題としては数点あるが、一つは救急医療の維持、充実である。飯南病院が救急医療に対応できなくなれば、地理的条件から最寄りの二

次、三次医療機関までは1時間以上かかるので、その意味でも、飯南病院が救急告示病院を維持し続けることは非常に重要であると考えている。二つ目は在宅療養支援の問題である。施設系の整備に加え、訪問診療、訪問看護、訪問リハビリなど、在宅療養支援ができる仕組みづくりが高齢化の進んだ飯南町にとっては重要である。医療側がしっかりと訪問し、対応することが重要であると考えている。患者さんが病院で見せる顔と在宅で見せる顔は全く違う。在宅ではとても良い表情をされる。そういう在宅の力を支えることが飯南病院として必要であると思っている。

次に連携についてである。医療機関の連携としては後方支援医療機関から医師派遣を受けている。とりわけ雲南病院からは松井先生に週1回診療に来ていただいている。地域住民との連携については、地域住民とともに医療の確保のために何が出来るかを学び、医療を守り支えることを目的に、平成22年に飯南町の医療を守り支援する会が設立された。産業との連携については、飯南町の基本施策の一つに森林セラピー事業がある。この森林セラピーを介護予防に活用しているが、平成24年度より地域包括支援センターに理学療法士を配置し、直営の通所型介護予防事業「まめな塾」を開始し、森林セラピーを介護予防事業に取り入れている。

次にお口から始める健康な街づくりについて紹介する。生命地域という素晴らしい環境のもとで、よい食べ物を育て、健康な口でしっかりと飲んで食べる。そうした総合的な町づくりの視点からも健康戦略実践の中核として、三上先生が指導するお口から始める健康なまちづくりを位置付けている。

最後に、住民の元気は地域そのものの元気であると言え。生きたい村推進センターでの取り組みを、保健・医療・介護・福祉にとどまらず、産業を初めとした多くの分野と連携し、飯南町という地域そのものがより元気になるよう、様々な取り組みに挑戦して行きたいと考えている。

会場との意見交換（敬称略）

（会場発言） 沖田先生に質問させていただく。最後のところで一人一人の包括ケアが目標だと言われたが、本当に良いことだと感じた。質問は、長年活動を続けられる中で住民の意識がどう変化したかが一つ。二つ目はスタッフの意識がどう変わったか。三つ目は黒字が続いている要因について。四つ目は御調町として包括ケアを実践する中で医療費は下がっているか。



（沖田） 一点目については、御調町から離れて端的に見たときにはやりすぎていると思う。サービスをやりに過ぎて、結局住民がお客さん状態なので、次に何をやってくれるのかという状況になって来ている。二つ目は、職員もよそを見て初めて包括ケアのすごさが分かる。要するによそを見たほうがいいということはあると思う。三つ目は、よく分からないがこれまで大きな借金をしていないということ、医師数が減っているのに収益は減っていないので、スタッフが頑張っていることだと思う。四つ目は、合併前のデータと比較すると、広島県平均と御調町単独の老人医療費は県平均より下回っており、効果はあると思う。

（会場発言） 沖田先生には大変感銘深いご講演をいただき、我々が想像していない昔から先進的に始められているというところが、国の一つの道しるべになったというふうにいる。

（会場発言） 雲南市地域包括支援センターの小砂です。今回は医療中心ということでお話であったが、包括としての連携を密にさせていただきたいと思っています。

（会場発言） 町立奥出雲病院の本田です。地域連携がとても大切であるということに非常に感じた。私たちが地域包括ケアということを勉強して、皆さんが安心して暮らせる町づくりを進めていけたらと思う。

◆アンケートで寄せられた感想（一部抜粋）

○基調講演について
・御調町において早期に取り組まれたことが、他に真似できないシステムを作り上げられたという先見の明を感じた。
・地域にとって必要な包括ケアはなにかを考えることから始める必要性を分かり易く聞かせてもらい参考になった。

○パネルディスカッションについて
・先生方が2025年問題を考えられていることを知りびっくりした。私たちが考えていかねばと思った。
・各病院院長が熱心に国の施策にどう取り組もうかと考えておられる姿に感銘した。

○シンポジウム全体について
・今回も地域医療について様々な話を聞くことが出来て良かった。将来、雲南、飯南、奥出雲のどこかで医療に関わることで出来る職に就きたいと強く感じた。
・在宅を取り巻く開業医・施設側などの活動も今後発表してもらいたい。

